

ていた当時の虜囚たち。ましてやそのために遠くシベリアの異郷に散った幾多の同胞を思うとき、まさに断腸の思いを禁じ得ない。そしてまたこれをシベリアの「悪夢」としてだけ片づけることはできない。

シベリアの思い出

熊本県 畑 中 眞 澄

復員して四十三年が過ぎ、抑留生活の体験を書くことになったが、改めて回顧するとき、ほうふつとして脳裏によみがえるものもあれば、記憶の定かでないものもある。抑留された場所や強制労働に従事した作業内容によって違いはあるが、捕虜としての生活はみな一緒であったと思う。

私たちが収容された場所は、シベリアでも東部の樺太に近いコムソモリスクとソフガワニとの中間のムーリ地区であった。いろいろの資料から二十万人以上の抑留者がいたようである。

主に従事した作業は、シベリア鉄道の延長と複線化の仕事。将来、町になり、住民が生活する上に必要な水道の基幹の埋設であった。

シベリアでの生活は空腹と寒さ、そして過酷な労働と疲労の連続であった。アムール川の凍結期と解氷期には物資の輸送が途絶え極度の食糧不足に遭い苦しい目に遭った。

まず鉄道作業である。鉄道の路床をつくるため、山の崖を切り開く作業であるが、ツルハシとスコップの粗末なことにまず驚いた。従って作業能率は上がらない。すべて作業にはノルマがあるから、それを達成しなければならぬのだ。監督はカンカンに怒って、声高にののしるが、ロシア語が全く通じないので、どうしようもない。通訳を呼んでもなかなか来ない。作業の手順、監督の意思図するところの意思が通じ合わなくて大変困った。意思の疎通には言葉の果たす役割を痛切に感じた。意思の疎通がうまくいかずに、気短かな日本軍の将校が軍刀で切りつけた事件も起き、将校の軍刀の没収になった。

線路の路床に使うバラスおろしは夜間作業であった。

次々に運ばれてくるバラスをおろすのも並み大抵の作業ではないが、ソ連の女子囚人の作業で軽作業の部に入るそうである。満足な食事もとっていない我々には負担が大きかった。

我々の手によって鉄道が延長され、複線化が進むにつれ、ソフガワニの方に向かって毎日昼夜を分かたず輸送が始まったので、一体、何を運んでいるのかと聞いたところ、武器を千島の方に送っているのだと言う。無蓋車の上にシートをかぶせてあるが、それらしきものであることがわかった。

鉄道工事も一段落ついたので、次は水道工事であった。この工事は水道の基幹になるので、極寒のシベリアでは浅く埋めたのでは凍結して破裂してしまうので、相当深く埋めなければならない。

深さ七メートル。マンホールに当たるところは九メートルまで掘らなければならない。

工事の手順としては、掘り下げるに従って側板を組みながら進めるが、掘り下げると掘った土を上げるには三段構え四段構えで土を穴の外に出さなければならない。

地中深く掘れば土のところばかりはない。固い岩盤に当たって困難したこともたびたびあった。真夏でも七メートルも掘ると薄い氷の層を見ることがある。これがツンドラ地帯の特徴であることを知った。

掘り終わると直径三十センチの鉄管が入られるが、その鉄管に三菱のマークがついていたのは驚いた。多分満州から持ってきたのであろう。土を埋めもどして、上部に一メートル土を盛って終了である。一メートルの盛り土は将来、盛り土が下がることを想定して盛る。

以上が我々の二年間における主な作業であったが、その他、住居の屋根の修理、丸太小屋の建設、ダイナマイトの穴掘り等も行った。

次に収容所内の生活と自分自身の生活体験を述べることにする。

まず、先にも述べたように、「言葉の問題」を解決しなければならぬと感じ、このことに取り組んだ。何年シベリアに抑留されるかわからないので、言葉を覚えなければ不自由であるとともに、ロシア人と接する上においても必要不可欠の問題であるので、白カバの皮を何枚も

用意して作業場に行き、休息時間に歩哨や監督に聞いて発音を片仮名で記した。作業から帰って、就寝後、ランプの光で復習し、翌日、実際に話したりして習熟したので、何とか日常会話には不自由しなくなり、自分の意思を伝えることができて、作業現場でも役に立った。三か月間、事務所勤務を命ぜられ、ロシア人と寝食をともにし、心の底から信じ合い語り合うことができた。

次に食生活であるが、先にも述べたとおり、物資の輸送が麻痺したとき、みそをお湯に溶かしただけの汁を飯ごうの中ぶた一杯で終わったり、ジャガイモ三個だったこともあった。夕食後や休みの日には、それぞれの国自慢の料理に花が咲き、白い米の飯に塩をつけた握りが食べたい、果てはぜんざいとするこの違いに論議が及ぶ等何を描いても食い気の毎日であった。

このような状態の中、入ソ一年目は、栄養失調やビタミン不足に悩まされたのである。毎月の身体検査で極度の疲労者（Cクラス）は療養施設に送られたが、私も二回送られた経験がある。

急性肺炎にかかり抵抗力がなく、だれも知らぬ間にひ

とり息を引きとった者もいた。生きて故国の土を踏めずに異国の地でこの世を去った彼らの魂は今どこにいますか……。戦争の犠牲になって捕虜のまま死んでいくのはさぞかし残念であつたろうと思う。

幾度も移動するたびに「ダモイ東京」を聞かされ、だまされ続けたこと、歩哨に銃で小突かれたこと等々、走馬灯のごとく思い出され、私たちの脳裏からいつまでも消え去ることはない。

シベリア抑留の体験

新潟県 阿波根 朝 宏

シベリア抑留体験は、今までに多くの抑留者らが、それぞれの立場や、環境での体験談が発表されている。それには、抑留の苦難、過酷な労働、ノルマによる食事のことなどさまざまである。

シベリア抑留は、その体験者が語っているように、全く複雑多岐であり、その焦点の把握が難しい。私も自分